

上肢活動の評価に基づくハンドリング実技

伏見岡本病院 三浦雄一郎

ハンドリング実技とは、私たちが普段臨床で用いる他動運動、自動介助運動、自動運動、抵抗運動と異なるものでしょうか？個人的に考えるハンドリング実技は、これらの運動の中で自動介助運動に近いと思います。一般的な自動介助運動では、肩関節屈曲、外転、膝関節屈曲、伸展のように画一的な運動をイメージがされます。しかし、ハンドリング実技では、画一的な運動だけでなく、実施する環境、姿勢への配慮、関節運動、筋緊張の変化を感じ取りながら行われるように思います。よって、セラピストの知識、経験が多分に影響する可能性があるかもしれません。そして、ハンドリング実技は治療のみならず、患者様の潜在的な能力を把握する評価も併せもちます。

上肢の活動で考えてみます。座位や立位で肩関節屈曲させると肩甲帯挙上の代償動作が生じ、可動域制限が生じたとします。潜在的な能力を把握するために姿勢を変えて、側臥位で肩関節屈曲を自動介助運動します。姿勢を変えることで代償運動が軽減します。この時、肩甲帯後退が生じたとします。肩甲帯後退に何の意味があるのか？肩甲帯前突をハンドリングで誘導するとなにがおこるのか？その結果は何を意味するのか？このようなことをハンドリング実技にて評価、治療していきます。

本セミナーは、以下の流れで実施していきたいと考えている。

- 1) 上肢活動のハンドリングに必要な自動介助運動の基礎研究
- 2) 上肢の応用動作の基礎研究
- 3) 上肢活動のハンドリング実技の実際

当日は、どうぞよろしくお願い致します。